

第 62 回物性若手夏の学校開催報告

京都大学大学院人間・環境学研究科 瑞慶覧長空

1 概要

2017年7月25日から29日にかけて、ぎふ長良川温泉ホテルパークにて第62回物性若手夏の学校が開催され、盛況のうちに終了した。参加人数は講師18名、スタッフ22名、一般参加者162名の合計202名であった。

物性物理学は、広大な分野を対象とし、さらに刻一刻と発展を続けている。そのため若手研究者にとっては全体像をとらえることが困難である。それに加えて、研究を行う上で研究者は分野の最先端を把握する必要がある。物性若手夏の学校は、若手研究者の物性物理学の全体像の把握、最先端の把握を助けることを目的に開催されている。

物性若手夏の学校は日本の物性の分野における最大のサマースクールで、研究室外で若手研究者同士が学び合い、発表の経験を積み、議論し、親睦を深める数少ない交流の場である。それらを通じて参加者は物性という分野での知見を広げ、研究者間のネットワークを強めることができる。

第62回物性若手夏の学校では、物性の分野でご活躍されている講師の方々をお呼びし、基礎から最先端までをカバーする丁寧な講義をして頂いた。また、参加者に対して自身が現在行っている研究について発表する場を、口頭発表とポスター発表を含む多種多様な形で用意した。さらに、夕食後は座談会・懇談会という形で交流の機会を設けた。

2 夏の学校の内容

本研究会において表1のように招聘講師による講義、集中ゼミに加えて、学生発表として、グループセミナー、ポスターセッション、口頭発表(分科会)、フリーセッション、講師・学生ともに参加する交流の機会として座談会、懇談会が開催された。

講義、集中ゼミにおいては、表2に示す講師、演題で講演が行われた。講演の様子は写真1に掲載する。講演では参加者からの質問も活発になされ、活気あふれた時間となった。また、量子コンピュータの実演を行ったり、他の講師が講演に参加し講師間で議論がなされるなど、講演にとどまらない内容となった。講義においては、同一のテーマについて3日間に渡り、1日3時間、合計9時間をかけて講演していただいた。初学者を念頭に置き、初歩的な説明から始め専門的な内容まで解説していただくため、自分の専門とは異なる講義を受講する参加者も多数見られた。物性物理学の広大な分野を見渡す手助けとなったはずである。さらに集中ゼミでは各講師に3時間で講演していただいた。1日3時間の講演を2日分用意した。こちらは講義より時間が短い分、最先端の内容を扱う講演や、議論の時間を盛り込む講演など、非常に濃く、バラエティに富んだ内容となった。

表1 夏の学校プログラム概要

	7月25日(火)	7月26日(水)	7月27日(木)	7月28日(金)	7月29日(土)
午前		講義	講義	講義	チェックアウト
午後1	チェックイン	集中ゼミ	分科会	集中ゼミ	
午後2	開校式	ポスターセッション	ポスターセッション	フリーセッション	
夜	グループセミナー	総会・懇談会・座談会	懇談会	閉校式・懇談会	



換がなされた。非常に多様な学生が参加するため、分野分けは一つの課題となっており、今回のアンケートでも不満の声も見られた。その点は今後改善していきたい。また今回は座長をスタッフが務めたが、次回以降、参加者から希望者を募り座長を任せても良いのではないかという意見も出た。口頭発表の座長の経験も得難いものであり、そこから学ぶことも多いため、今後取り入れることを検討する。今年度新企画として開催されたフリーセッションでは、多くの参加者が一堂に会し、様々な発表・議論を行った。その様子は写真3左に示してある。例年議論し足りないという意見があるため、その不足分を補う目的で参加者が自由に議論を行える場として企画した。企画ではポスターを用いた議論、口頭発表のより深い議論などに加え、フリーセッションに向けた個人企画を用意してきた参加者も見受けられ、会場は活気に包まれていた。アンケートでも、各発表の議論に加え講義やゼミでの疑問点の解消に活用されていたことが見受けられ、目的はかなったといえる。来年度も継続を望む声も多く、望外の成功をおさめた。今後の課題として、参加者間でフリーセッションでの議論の予定調整をする工夫が求められた。次回に反映させよりよい企画として進化していくことを願う。ポスターセッション、分科会ではそれぞれ参加者の投票による賞を設けた。ポスターセッションでは最優秀ポスター賞を松本拓巳氏、優秀ポスター賞を川畑幸平氏、石川慧氏スピーカー賞を水田郁氏、デザイン賞を金子和哉氏が受賞した。分科会では井口照悟氏、下野聖矢氏、副島智大氏、古川頼誉氏、嶋屋拓朗氏、山家一樹氏が最優秀発表者賞を受賞した。

参加者の交流の機会としては座談会・懇談会が行われた。座談会においては、参加者から募った質問が講師に投げかけられ、普段はききづらい話題について交流が行われた。その様子を写真3右に示してある。日常的な悩みから、研究における悩みに至るまで、参加者にとっての目標でもある講師の意見を伺うことができた。会場からも追加で質問がなされるなど大いに盛り上がった。懇談会では一方、講師と学生の対話や、学生間の議論も行われた。懇談会の時間に研究内容に関する議論を継続している姿も見られ、交流の場にとどまらない時間となった。

3 参加者の声と今後の課題

本夏の学校は物性物理学という広い分野を対象にしているため、様々な専攻・所属・学年の研究者が一堂に会するという点、講義・集中ゼミ合わせて18種類の多様な講演に大きな特徴を持つ。実際参加者のアンケートでは、普段接点のない研究者と交流が持てたことや、議論・講義を通じて新たな知見を得られたことなどに高い評価を頂戴した。中には、本夏の学校を通じて研究テーマを見つけた、という参加者も存在するなど、高い影響力を持つ企画であることがうかがえた。

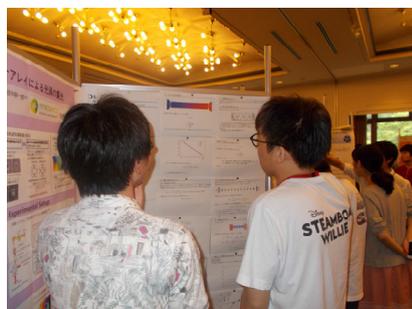


写真2 左：ポスターセッションの様子。参加者は活発に議論を行っていた。右：分科会の様子。座長はスタッフが務めている。



写真3 左：フリーセッションの様子。ポスターボードに加え、机、ホワイトボードを用意した。活発な議論が交わされた。右：座談会の様子。講師の先生に学生から寄せられた質問に答えていただいた。

表3 第62回収支報告

収入 (単位: 円)	
項目	決算額
1 公的機関援助	1,654,649
1 岐阜県清流の国推進部清流の国づくり政策課	400,000
2 (公財) 岐阜観光コンベンション協会	140,000
3 東北大学金属材料研究所	200,000
4 東京大学物性研究所	379,529
5 京都大学基礎物理学研究所	435,120
6 (一財) 材料科学技術振興財団	100,000
2 企業等協賛金	872,000
3 参加費	644,000
4 前年度繰越金	1,192,917
合計	4,363,566

支出 (単位: 円)	
項目	決算額
1 講師招聘費	683,360
2 スタッフ援助費	976,450
3 印刷費	619,622
1 テキスト印刷・郵送費	400,081
2 ポスター印刷・郵送費	87,133
3 当日配布物印刷・郵送費	132,408
4 企画運営費	450,964
1 会議室使用料	345,600
2 備品レンタル料・送料	88,433
3 企画景品	16,931
5 参加者援助費	296,275
6 準備局経費	353,273
1 下見費用	29,952
2 備品購入費	74,142
3 前泊代金	92,519
4 後泊代金	42,080
5 サーバーレンタル	73,440
6 協賛関連事務費	3,220
7 振込手数料	13,442
8 会場事務にかかる費用	10,000
9 その他携帯料金、送料など	14,478
7 次年度繰越金	983,622
合計	4,363,566

